

中野香織

⑫もう〇日も〜していない

生オゾン・ウエルズと部屋ごとビデ。
うくん、なまなましい光景ですねえ。

鹿島茂さんの「セーラー服とエッフェル塔」(文藝春秋)によれば、ビデにも二種類あるらしいよ。ひとつはフランスに昔からある「身体衛生器具」としてのビデで、だから女子寮の部屋にもあるんだって(風呂はなくともビデだけは)。もう一種類が、アメリカに渡ったビデで、こちらは避妊器具と思ひ込まれた(風呂ならあるし)結果、じゃんじゃん噴水するタイプになったんだって。ウエルズの「部屋ごとビデ」はどっちのタイプだったのか。悩ましい。

それはそうと、映画飢餓状態、無事に解消されましたか? 映画の仕事をするために映画を見る時間がなくなる、っていうジレンマはツライですね。わたしもこしばらく字ばかり書く日が続き、気がついてたら、もう10日も映画を見ていない。

で、ふらふらと見にいったのが「もう365日も眠っていない」男の映画、「マシニスト」。いや〜シヨック。たかが「もう10日も映画を見てない」ぐらい何だっの。30キロ減量してあばら骨くつきり出てきたクリスチャン・ペイルの骸骨姿だけでも衝撃なのに、ドイツ表現主義風というのか、



「ステップフォード・ワイフ」

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。



ドーバー 越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



カット制作=井上陽子

陰惨な不眠の悪夢をこれでもかと怖くする、不穏で殺伐とした映像と音楽…。不気味すぎで、生きた心地もしなかったのですが、最後にストーンと腑に落ちる「そうだったのか!」の結末があって、映画ならではの技にしばし唸ったのでした。

感心はしたんだけど、悪夢追体験でげっそりしたので、美男美女が着飾って出てくる映画でなごみたいなどと思って、宝石で飾り立てたニコル・キッドマンのお人形顔のポスターに誘われるように「ステップフォード・ワイフ」を見る。

奇しくもステップフォードって、「もう365日も妻と…していない」夫たちの理想郷だったんですね。花柄のワンピースを着て家事をいそいそとこなしちゃう、従順でセクシーなプロンド妻たちがずらりと並んでスマイルを決めるだけでも爆笑してしまいました。72年のアイラ・レヴィンの原作も、75年のキャサリン・ロス主演版もホラー色が強いので、今回これをコメディにしたのは正解ですね。今どき両性間の闘争のテーマなんてゆるいだけだし。

そうそう、同じ「もう〇日も妻と…していない」夫の反乱でも、中国版はコメディを通り越して悲哀すら帯びてきますよ。「妻が28日間、してくれない」ことに困った夫が警察に助けを求めて電話したんだって(アナノヴァのニュースが報じた実話)。

助けてもらえなかったさうだけけど。